

学者 兵頭文齋の家 其の壱

地方の民家

私たちの住んでいる愛媛県には、まだ各地に古い家が残っている。

北条市 阿部家 ▶



三間町 毛利家 ▲

家というものを見ると、その土地の風土、歴史、そして暮らしなど様々な事がわかる。だから民家は、江戸や明治の過ぎ去った時代をイメージさせてくれる。ももないが、町や村にはそんな民家がまだ残っている。



失ってもよいのだろうか

私たちは、古い家が消えていくことを見送ってよいのだろうか？

家は木と同じで、一度壊してしまったら再び育てることはできない。古い家の隠れたところまで手の込んだ細かい仕事は、建築について学んでいる私たちに建てた人の思いと、大工の懸命な息づかいを伝えてくれる。そんな工芸作品とも言える建物を、日本の文化の一つとして失ってはいけないと、いろいろな家を見て思った。



▲釘隠し



▲欄間

▲もちおくり

消えていく現実



▲屋根が抜けている。

▲兵頭文齋邸の現状。▶



しかし、祖先から受け継いだ家々が、消えつつあるというのも現実である。マンションや新しい家が建ち並び、日に日に変わっていく風景の中で、古い家はポツンととり残され、また生活の変化により、その役割を失いつつある。そして今、このような古い家は、「残すか」「壊すか」の岐路に立たされている。

▶雨漏りによって壁が腐りかけている。

とり残された家 兵頭文齋邸



▲兵頭文齋邸の長屋門

古い家を残しているうちに、私たちは兵頭文齋の家に出会った。この家は現在、町が管理している。しかし、町は迷っている。「壊すか？残すか？」そんなニュースを知った私たちは建築士の生徒として、家の価値や木造技術や家の歴史を調べ、私たちなりの結論を出そうと思った。

学者 兵頭文斎の家 其の式

全体の間取り

この家は、現代の住宅とは全く異なった間取りになっている。8畳2間、6畳2間の4つの部屋といった単純なものである。

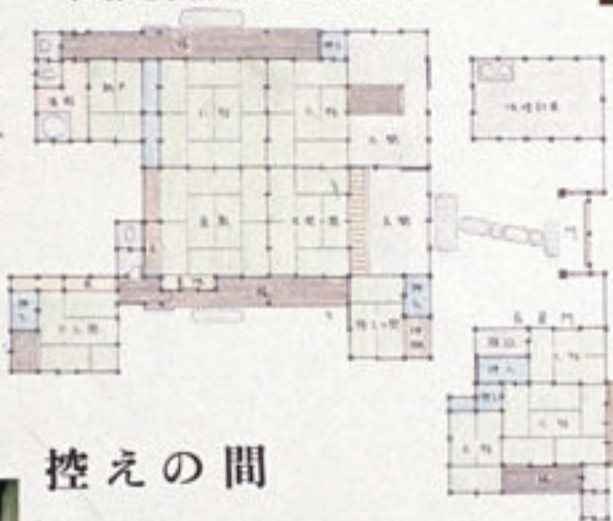
玄関からすぐ二ノ間（玄関の間）、そして表座敷の2室が主に使われ、大勢の人が使用する時には、間仕切り（ふすま）をはずし、4つの部屋を1つの大きな空間として使っていたようだ。また、玄関の大きさが3間×4間と広いことも特徴のひとつである。

この家は学問を教えたり、話術を教えたりすることを目的として造られている。台所や不入間、納戸は四隅に目立たないように造られている。



ふすま

昔は紙も大切に使われ、ふすまの中いらなくなった紙が貼られている。それらを調べるとその頃の様子などを知ることができる。



門・長屋門

この家の門は片引き門である。普通、この大きさの門だと両開き戸にするのだが、吉田藩では身分によって門が決められており、百〜二百石取りの藩士の門は片引き門であった。門は出入りに使われるだけではない。長屋門に入って裏に部屋があり、使用人が使っていた。そこからは人の出入りが監視できた。



武士の心構え

南側の廊下を奥に行くとき白い鳥の描かれた杉戸がある。その奥には部屋がないように見える。ところがここは、戸になっており、開けてみると左に不入間、右には裏口があって敵が来ても逃げられるようになっている。

このような造りは武家の住らしいものである。



控えの間

玄関の南にある3畳の控えの間ここには床の間があり、書生や中間が控えていたと思われる。客が来たときなど玄関が近いのでここから出ていくことができた。

生活の場

寢室など普段の生活に使う場は表の部屋を使わず、四隅の目立たないところに設けている便所、風呂、納戸3畳、不入間が使われていたようだ。



学者 兵頭文斎の家 其の参

学者 兵頭文斎

吉田藩の藩士、兵頭文斎（1804～1890）は、朱子学系の学者であった。最も功績は、江戸から明治へとつづる時代においても、地元の若者に学問を教えその門下から実業家や政治家が多く育った。兵頭文斎の家はそのような意味から見てもこの土地の学問文化の中心であった。

文斎はまた詩や絵画に優れ、趣味としては鳥刺しが長けていた。鳥刺しとは、細い竹竿などの先端に鳥ちをぬりつけ小鳥を捕らえることである。文斎のこの技は人々から神業のようだと賞られるほどであった。また、謡曲、鼓の師としてもその名があり、明治、大正にかけて、吉田の謡曲を盛大にしたという一面もある。

小さな土地に生きた人だが吉田町にとって忘れてはならない人物であると言える。



▲吉田町立図書館

吉田の歴史と文化

明暦3年（1657年）7月、宇和島藩主伊達秀宗の五男宗純（むねずみ）が3万石をわけられて吉田藩ができた。城にあたる陣屋を町の南につくり、立間川と河内川を整備して堀を造った。吉田はこの陣屋を中心に短冊状の通りを造り町ができた。

現在、城の跡には町立図書館が造られ、橋や川など昔の様子をそのままのこしている。また、町全体も新しいものと古いものがあり、兵頭文斎の家以外にもたくさんの古い町並みが残っており、昔をしのぶことができる。



▲内子町 石畳の宿

生かしようはあるのか — 私たちの結論 —

家についていろいろ調べた。古い家は現代の環境に取り残されているが、二度と造ることのできないものであるとも思う。

兵頭文斎の家は生かしようがあるのだろうか？という疑問を抱いていた時、取り壊す寸前の家を活用した「石畳の宿」という施設を見学した。利用客は一年間絶えないという。各部屋に置いてある落書き板には「心が落ち着く。懐かしい感じがする。必ずまた訪れたい…」と記されていた。古いものを捨て去っていたことに対する反動のようにも感じた。現代人も木のぬくもりを忘れていたわけではない。

兵頭文斎の家は一残すべきである—という結論に達した。

そして、私たちなりの生かし方や活用の方を考えた。

火災について

文斎の父「清別」の代の時のことであるが、寛政8年8月、老母が茶を焙がで焙じていると、過熱してしまい家屋が全焼してしまった。このことから現在残っている家は寛政8年以後に建てられたものとわかる。



▲兵頭氏家譜

寛政八年八月十二日子相育と家事
（被仰付嘆息に付母生退御在所へ
澤留被仰付
右と子相は先母回許に於て茶と焙炒
にて焙し過熱の爲て家屋全焼其責
を負ひ末席（格下げの御地置退下家小）



▲現在している町並

学者 兵頭文齋の家

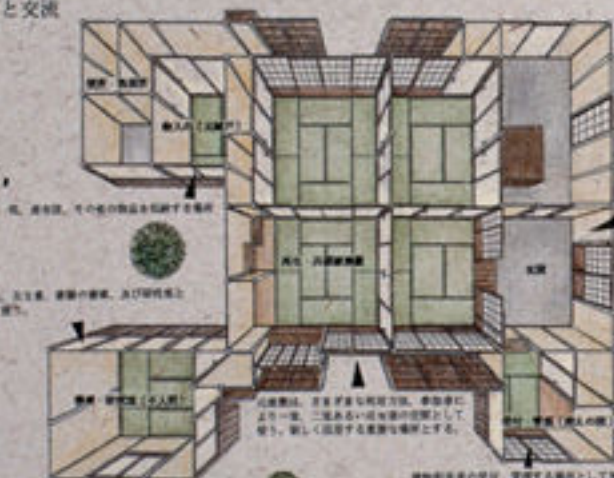
其の四

新しい生命を

兵頭文齋の家をどのように生かすか、それが最も重要なことだと思う。人が集まり、利用してこそ家は価値を持つ。その点に立って、私達なりに江戸時代から続くこの家の利用・活用方法を以下に書いたように考えた。過去の歴史と現在がつながっている意味を家が感じさせ、さらに次の時代へと伝えることの大切さを人々が思っていてほしい。

1. 国際交流の場

国際時代の中で、外国の人に日本の伝統、文化、生活を感じさせる場所として利用する。実際この家に泊まってらい、(たみ、ふすま)の体験をしたり、作法や習慣、遊びなど学ぶことによって、国際理解と交流とを深めることができる。

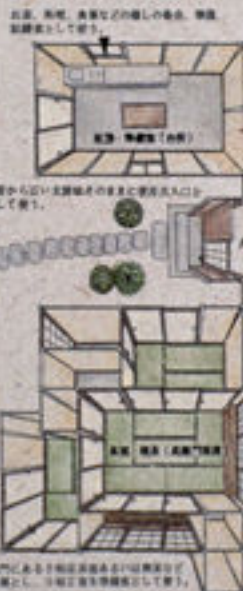


2. 古典文化の伝承

学校に近いという利点を生かし、この家で古典、日本史の授業を行う。コンクリートで覆われている教室とは違って、昔の空気を感じられるので、楽しく意欲的に授業に取り組むことができる。歴史を身近な物として感じ、それまでとは違った学習への興味がわく。

3. 古文書、歴史の読書会

図書館に近い利点を生かし、古文書の研究、執書や歴史ものの朗読会、講演会を行う。



4. おけいこ

日本の古典文化や芸能を学ぶ場所として使用する。お茶の日やお花の日、写の日、詩吟の日などいろいろな教室を開催する。お茶は長屋門の中の独立した部屋を使う。

5. 集まり

老人会、町内会、婦人会などの小グループが自由に使える場所とする。話し合いの場所として使うだけでなく、様々な催しを行う。大人だけでなく、これからの将来になう若者や子供たちも自分たちのしたいことができる場として積極的に使えるようにする。